徳川美術館　名品コレクション展示室

令和７年 １月４日(土)～３月23日(日)

展示期間　A:1/4(土)～1/28(火)　B:1/29(水)～2/26(水)　C:2/27(木)～3/23(日)

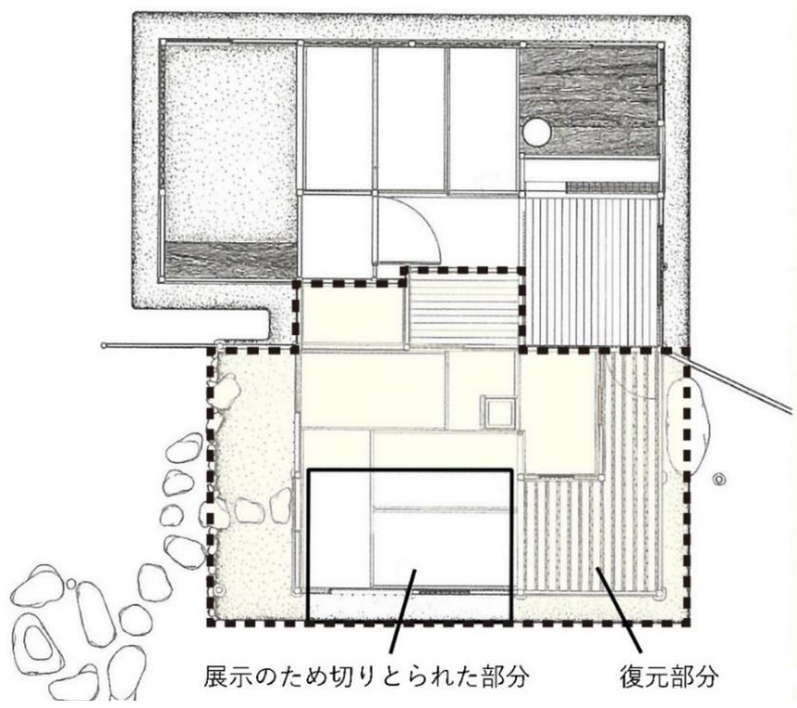
大名の数寄　― 茶の湯 ―

桃山時代に武将の間でも流行した「侘び茶の湯」は、江戸時代には「御数寄屋(おすきや)」の接待として、公式行事の一部に組み入れられた。こうして固定された茶の湯は、「侘び茶の湯」の持っていた美や新たな価値観をうち立てて行く自由な創造の精神を失って武家故実となり、格式行事と化した。大名は邸に茶室を設け、将軍の「御成(おなり)」をはじめ、晴の行事に備えた。茶の湯道具もまた格式道具となった。桃山時代に武将や上層町衆や数寄者(すきしゃ)が持っていた道具の大半は、江戸時代には将軍や大名の秘蔵品となり、「名物」の道具は、時に一国一城にもあたるとされ、その所持、非所持が家の格を表すとまで評された。

No.	名　　称	作者・所用者・所蔵者・寄贈者など	時代	世紀	期間
猿面茶室					
1	拾遺集切　壬生忠岑「春たつと」	伝藤原定家筆	鎌倉	13	B
2	古今和歌集切	伝伏見天皇筆	鎌倉	13-14	C
3	和歌懐紙「詠伴松栄久和歌」	後西天皇筆　久曽神昇氏寄贈	江戸	17	A
4	青磁柑子口花生		元-明	14-15	
5	芦屋尾垂釜		江戸	17	
6	伊賀瓢形水指	岡谷家寄贈	桃山－江戸	16-17	
7	唐物細肩衝茶入　銘 一筋なだれ		明	16	
8	藤村庸軒竹茶杓　銘 琴上		江戸	17	A B
9	竹茶杓　銘 遠	徳川宗勝(尾張家8代)命銘	江戸	18	C
10	黒樂茶碗　銘 横槌	伝樂2代目長次郎作	桃山－江戸	16-17	
11	昭和切　古今和歌集「としのうちに」	藤原俊成筆　勅使河原順三氏･千代子氏寄贈	平安	12	A
12	細川幽斎書状　上林久茂宛　卯月十二日		桃山	16-17	B
13	和歌詠草「君かへむ」	木下長嘯子筆	江戸	17	C
14	布袋図　三幅対の内	徳川光友(尾張家2代)筆	江戸	17	A
15	連翹に鶯図	山本梅逸筆	江戸	19	B
16	紙雛図	三条公修賛･田中訥言筆　菱田家寄贈	江戸	19	C
17	古銅細口鬼面一ツ耳花生		江戸	17	
18	青磁算木手花生		南宋	13	
19	古染付手桶形水指	徳川斉荘(尾張家12代)所持	明	16-17	
20	唐物茶壺　銘 橋姫	徳川綱吉(5代将軍)･徳川綱誠(尾張家3代)所持	南宋－元	13-14	
21	唐物大海茶入　銘 丸海	徳川光友(尾張家2代)･継友(同家6代)所持	南宋－元	13-14	
22	瀬戸米市手茶入		室町－桃山	15-16	
23	油滴天目(星建盞)		南宋	12-13	
24	高麗雲鶴茶碗　歌銘 高浜		朝鮮王朝	17	
25	金襴手唐子文仙盞瓶		明	16	

【特別公開】

千利休竹茶杓　銘 泪　大名物	古田織部･徳川家康･徳川義直(尾張家初代)所持	桃山	16	2/22～3/2

【猿面茶室】

名古屋城二之丸御殿にあった「猿面茶室」を復元している。待庵･如庵と並んで茶室として最も古く注目すべき遺構で、国宝にも指定されていたが、昭和20年(1945)、戦災焼失した。もとは清須城内に営まれていたが、慶長15年(1610)、名古屋城内に移築され、上使の接待場にあてられていたと伝える。明治に至って城内の建築物が払い下げられ、のちに末森入舟山(現・千種区見附町)に移築したが、明治13年(1880)、名古屋博物館(後の愛知県商品陳列館)にこれを寄付、さらに昭和８年(1933)、鶴舞公園内に移設された。